

登山学校レポート（第5回講習）

氏名（南家弘毅）・所属会（福岡アゼリア山の会）

9/9（土）ショートクライミング（日向神道端エリア）

A班：4人 B班：4人 ※1人見学

9/10（日）マルチピッチクライミング（日向神八女津媛スラブ）

A班：2人 B班：2人 C班：3人 ※1人見学

《以下本文》

1. 岩場に潜む危険、およびクライミングでの安全管理・自分にできるリスク回避

■岩場に潜む危険

この2日間の講習で思い知ったのは、岩登りが落下、強打、衝突、落石などさまざまなりスクを少しでも小さくするために、緻密で細かな想定を無数に積み上げた中で行われる高度なスポーツだったのだということ。それは裏を返せば、地面から足を離し、重力に反して岩を登る間中、大きなけがや死に至る危険があることを意味している。私は30数年前、沢登りの基礎訓練として、夏前はきまって岩登りゲレンデに通っていた。いま考えると（登攀技術はたくさん習ったが、その意味を自分の中で落とし込んでいなかった点で）無知に近く、けがをしなかったのは運が良かっただけかもと振り返った。

浮石と落石に対する注意は昔の感覚が残っていたけれど、利用する人工物にも相当の注意を払っておかないといけないことを今回学んだ。それは例えば、ボルトやハーケンの強度をどこまで信用するか（しないか）、ロープやカラビナの摩耗具合、万一クライマーが落下した時に走り出したロープが、セルフビレイとなっているスリングと交差していた場合にスリングが熱で焼き切れる危険性などだ（最後の焼き切れのリスクは、マルチピッチクライミングの時に講師から指摘を受けてひやりとした）。

■クライミングでの安全管理（リスク回避）

クライミングにおけるリスク回避のポイントを2つ挙げろと言われたら、「相互確認の徹底」と「仲間同士の合図・声掛け」と答える。

前者は、ハーネス装着時のベルトの末端処理に始まり、岩場上部の同じ支点で休憩する際にセルフビレイを取ったスリング（ランヤード）にテンションが掛かっているかどうかのチェック、ラッペル前にビレイデバイスのロープの出入り方向が逆になっていないかなどたくさんある。いずれも仲間が近接しているから相互確認できる。

一方、後者は、リード（あるいはセカンド）クライマーとビレイヤー間の距離が離れている場面において、命綱ならぬ“命声”ではないか。例えば、トップロープで終点まで登り上がったクライマーが、地面に下りる前に必ず「テンション！」と呼び、ビレイヤーがロープをピンと張って「テンションOK」と応える。クライマーが下のOKを聞いてから「下ります！」と言い、ビレイヤーが「下ろします！」と応じる。もし、このどれか一つでもスルー

された状況でクライマーが足を滑らせ落下したとしたら、ロープの緩みが大きい分、落ちる距離が長くけがをする可能性が高まる。セカンドクライマーが、クイックドロワーにロープを掛ける前に「クリップします！」と伝えるのも、クライマーがロープの引き上げを楽にするだけでなく、ビレイヤーに気を張ってもらう意味があるとも知った。

リスク回避が十分なクライミングをするには、クイックドロワーへのロープの掛け方や逆クリップにならないようにすることなど、身に付けなくてはいけないことが山積みだ。ただ、単に覚えるだけでは駄目だろう。スピーディーに手際よく一連の作業をこなさなくてはいけない。それは、5人の班でスラブを3ピッチで登った際に強く感じた。待たせる時間が長いことで仲間の体力や集中力を少しずつ奪うし、雨や雷といった気象変化に安全に対応できなくなることを肌で感じた。岩登りの場数を増やしていきたい。

2. ビレイヤーの役割およびビレイ中の注意点

■ビレイヤーの役割

ビレイヤーはクライマーの安全の大部分を、文字通り体を張りながら抱える黒子の大役だ。特にリードクライマーのビレイをする際は、ロープを緩めず張り過ぎずという塩梅、加減が、クライマーの要望に極力合わせる事が求められる。そのためには、クライマーの状況から一瞬たりとも目を離さないのは当然として、岩肌のボルトの位置、岩のステップやホールドがルート先のどうあるか観察し、クライマーの動きを先読みするのがベターだろう。集中力が必要だ。でも、首がとても疲れる。

■ビレイ中の注意点

リードクライミングのビレイはトップロープのビレイと違い、左右の手によるロープの握り変えをしないことを初めて知った。それだけ、リードクライミングはロープの送り出しや引き戻しがデリケートということだろう。例えば悪いが、魚釣りで大物がヒットした後、テグスの引きと緩めを慎重に慎重にするのに似ている気もした。

ビレイヤーがクライマーの動きに対応し集中する前提として、自身の安全確保を万全にしておくことの大事さを講師から何度も教わった。

地上でビレイをする際は、クライマーの真下に立たないとか、岩面に対して両足を前後に開いてクライマー落下時でも踏ん張れるよう斜めに構えるとかだ。また、マルチピッチの途中、岩の斜面でビレイする場合の鉄則も。確実な支点でセルフビレイを間違いなく取り、スリングに常にテンションをかけておくことだ。万一、テンションが掛かってない状態でクライマーが落ちたとき、ビレイヤーが振られてしまい危険だから。それだけとっていたら違った。ビレイヤーの強い動きが支点に過大な荷重をかけてしまい、最悪の場合、支点のボルトが抜け大事故になってしまう可能性があるというのだ。支点を取る際はボルトなど最低でも2箇所を使う、と真剣に語っていた講師の意図が理解できた。

登山学校レポート（第5回講習）

氏名（横山淳子）・所属会（アゼリア山の会）

9/9（土）ショートクライミング（日向神道端エリア）

A班：4人 B班：5人

9/10（日）マルチピッチクライミング（日向神八女津媛スラブ）

A班：2人 B班：2人 C班：4人

以下をテーマとしてレポート

1. 岩場に潜む危険

- ・熱射病、日射病
- ・ハチ、アブなどの虫
- ・落下物
- ・動揺している岩
- ・クライミングしている人どうしの接触
- ・急な天候の変化

1. クライミングでの安全管理・自分にできるリスク回避

- ・水分、エネルギー補給
- ・ヘルメットを必ず被る
- ・岩の近くは落下物があると認識しておく
 - ・ロープを下ろす時には周囲に知らせる
 - ・落石がある場合周囲に知らせる
 - ・周囲の人とか距離をとって登る
 - ・岩が動かないが確認しながら登る

2. ビレイヤーの役割

- ・クライマーの安全確保

2. ビレイ中の注意点

- ・ビレイヤーはセルフを取る
- ・ビレイヤー自身の安全確保に留意する
- ・必ず手袋を着用する
- ・グラウンドホールを避ける
- ・1Pかけるまでスポットを行う
- ・スポットを行う位置はビレイヤーの安全のため真下を避ける
- ・1P目は張り気味
- ・2P目は少し余裕を持って
- ・1Pまでの距離のロープを最初から出してデバイスをセットする
- ・1P2P目までは壁に近づいて
- ・2P目かけたら1.5から2メートル離れる

- ・ロープは張りすぎず緩ませ過ぎない
- ・ロープの内側に入らない、足が引っかかり危険
- ・ロープを引く時、デバイスの下で左右の手どちらかで握っている
- ・岩に対して正面を向かない
- ・落下しロープが引っ張られた時の事を考える
- ・面でロープを引く
- ・体を動かしながらビレイする事により動きが大きくなる
- ・下ろす時は壁に近づいて行う
- ・クライマーの命を預かっていると意識する

〈所見〉

暑い中のクライミング講習でしたが、学びの多い充実した2日間でした。

クライミングの際、登る事に対して重点を置いていましたが、今回の講習を受け、信頼できるビレイヤーがいるから安全なクライミングができるんだと実感しビレイヤーの重要性を再認識する事が出来ました。

坂井講師の「ビレイを見て」という言葉が一番頭に残っています。ビレイでは今まで自己流になっていた部分がありましたが、今回の講習でひとつひとつ丁寧に教えて頂きました。

暑い中のクライミング講習でしたが学びの多い充実した2日間でした。講師の先生方ありがとうございました。Y講師、夕食の準備調理後片付けまでありがとうございました。美味しい楽しい時間を皆さんで過ごす事が出来ました。

またいろいろなお話が聞けてとても刺激になりました。

今回の講習の学びをこれからの山行に活かしていきたいと思います。ありがとうございました。